

会話管理の観点から見た 「接続表現」における男女差

— 「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の
「対談」場面分析を中心に—

呉 秦 芳

1 はじめに

本研究では、現代日本語の大規模な自発音声データベースである国立国語研究所の『話し言葉コーパス』(英名は *Corpus of Spontaneous Japanese*; これを省略して CSJ と呼ぶ)¹⁾ を利用し、その中の「自由対話」を選んだ。具体的な内容は、話題の制約なしに、10 分程度、自由に対話を行うものである。対話から得られた録音資料を文字化して、対談における日本人母語話者の「自己発話力」²⁾ に関する談話実態を探る。また、文字化した対談の資料から、日本人母語話者の「接続表現」の用例を収集し、性別との関係から、量的・質的に考察する。

2. 談話レベルの「接続表現」に関する先行研究

これまで、文論の領域を超え、さらに談話レベルにまで伸張させる「接続表現」に関する先行研究は多くはない。現在の日本語教育では、また、「接続表現」はもっぱら独話場面における論理展開の一手段として位置付けられているのがほとんどであった。コミュニケーション能力の開発を目的とする日本語教育がのぞまれる。現在、接続表現が CSJ での会話においてどのような役割を果たすかを把握しておく必要がある。

よって、本研究は CSJ の会話における、性別に現れる接続表現の形式と機能に着目し、その使用実態などの様相から、会話管理のストラテジーを探る。

3. 接続表現の定義と種類

接続表現について、森田 (1985) は「機能上、先行する表現 (前件) を受けて、後続する表現 (後件) を展開する働きを持つ語である」と定義している。

野田 (2002) は、接続表現とは、「文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文論の接続語、接続句に対する概念である」としている。

本研究は、文章だけではなく、談話における接続表現も対象とするため、その範囲は、文章論の接続語句よりもさらに広い、接続詞相当の働きをする副詞や名詞、連語、句・節・文・段レベルの表現まで含んでいる。

4. 調査概要

4.1 調査目的

日本語母語話者の自然な発話場面での接続表現の使用実態と機能を明らかにし、性別との関わりに注目したい。

4.2 調査方法

本調査はCSJの対話を録音し、文字化したものを対象とした。性別により、どんな形式、どんな機能の接続表現が用いられるかを調査した。本稿では、データに現れた接続表現の機能に焦点を絞り、各種の接続表現が談話の中で現れてくる位置、談話の内容との関わりから、日本人母語話者の会話管理を明らかにしようと試みた。接続表現の文法機能の判定についての手続きは、筆者のほか、博士課程に在籍している、日本語母語話者二人に判定してもらうことにした。

4.3 分析方法

接続詞、接続助詞、又は、それに類似したものの中から、加藤(1984)の分類を参考に、次の三つの意味を持つものを選び、それらの使用形式頻度はパーセントとして表した。性別における使用する接続表現の形式と頻度に関しては、(表2)を参照されたい。「ば」、「たら」、「と」なども接続表現の一つなので、本研究では加藤の種類のほか、これも接続表現の種類として付加する。データに現れた接続表現を次のように整理してある。

- 1) 逆接の接続表現 ても/でも、けれども、が、のに
- 2) 因果の接続表現 から、ので、だから/ですから³⁾、テ形
- 3) 継起の接続表現 それで、で、という、し、それから/から/そして⁴⁾、テ形
- 4) 条件の接続表現 ば、たら、と、なら

(表1)「CSJ」に取材したデータについて

ファイル		インタビュアー(L) (出身地・年齢)	応答者(R) (出身地・年齢)
女 女 L R	D03F0008	神奈川・30代	神奈川・30代
	D03F00040	東京都・30代	神奈川・30代
	D03F00036	千葉・40代	神奈川・30代
	D03F00045	神奈川・30代	神奈川・20代
	D03F00058	埼玉・20代	東京都・30代
女 女 L R	D03M0004	神奈川・30代	神奈川・20代
	D03M0017	埼玉・20代	埼玉・20代
	D03M0037	東京都・30代	神奈川・30代
	D03M0048	埼玉・20代	京都・40代
	D03M0053	神奈川・30代	北海道・20代

5. 結果と分析

性別における使用する接続表現の形式と頻度調査に関する結果と分析は(表2)、(表3)、(表4)の通りである。

(表2)性別における使用する接続表現の形式と頻度

性別 \ 接続表現	逆接の接続表現	因果の接続表現	継起の接続表現	条件の接続表現
女性	30.3%	18.2%	43.2%	8.3%
男性	31.3%	22.5%	38.4%	8.3%

(表3)女—女 おける使用する接続表現の形式と頻度

項目 \ 話者		D03F0008	D03F00036	D03F00040	D03F00045	D03F00058	総数
逆接	でも	2(3.7%)	13(22.8%)	5(7.8%)	5(9.4%)	3(9.1%)	28(10.7%)
	けど	6(11%)	15(26.3%)	10(5.6%)	10(8.9%)	11(33%)	52(20%)
	が	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	のに	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
因果	から	2(3.7%)	1(1.8%)	6(9.4%)	0(0%)	0(0%)	9(3.4%)
	ので	1(1.9%)	2(3.5%)	0(0%)	1(1.9%)	0(0%)	4(1.5%)
	だから	0(0%)	3(5.3%)	2(3.1%)	2(3.8%)	2(6.1%)	9(3.4%)
	テ形	9(16.7%)	6(10.5%)	0(0%)	10(18.9%)	1(3%)	26(9.9%)
継起	それで	0(0%)	2(3.5%)	0(0%)	1(1.9%)	1(3%)	4(1.5%)
	で	2(3.7%)	0(0%)	4(6.3%)	2(3.8%)	1(3%)	9(3.4%)
	という	1(1.9%)	3(5.3%)	12(18.8%)	7(13.2%)	4(12.2%)	27(10.3%)
	し	2(3.7%)	0(0%)	5(7.8%)	4(7.5%)	1(3%)	12(4.6%)
	そして	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	テ形	21(38.9%)	15(26.3%)	10(15.6%)	9(17%)	7(21.2%)	62(23.8%)
条件	ば	1(1.9%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(0.4%)
	たら	2(3.7%)	0(0%)	7(10.9%)	2(3.8%)	1(3%)	12(4.6%)
	と	5(9.3%)	0(0%)	3(4.7%)	0(0%)	1(3%)	9(3.4%)
	なら	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
総数		54(20.7%)	57(21.8%)	64(24.5%)	53(20.3%)	33(12.6%)	264(100%)

(表4) 女—男 使用する接続表現の形式と頻度

話者		D03M0004	D03M00017	D03M00037	D03M00048	D03M00053	総数
項目							
逆接	でも	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(1.1%)	5(10.4%)	6(2.4%)
	けど	26(35.1%)	6(31.6%)	8(36.4%)	18(20%)	14(29.2%)	72(28.5%)
	が	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	のに	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(2.1%)	1(0.4%)
因果	から	1(1.4%)	0(0%)	0(0%)	8(8.9%)	2(4.2%)	11(4.3%)
	ので	2(2.7%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(0.8%)
	だから	0(0%)	0(0%)	2(9.1%)	12(13.3%)	0(0%)	14(5.5%)
	テ形	9(12.2%)	2(10.5%)	3(13.6%)	6(6.7%)	10(20.8%)	30(11.9%)
継起	それで	0(0%)	0(0%)	0(0%)	3(3.3%)	0(0%)	3(1.2%)
	で	10(13.5%)	0(0%)	1(4.5%)	10(11.1%)	2(4.2%)	23(9.1%)
	という	0(0%)	0(0%)	0(0%)	4(4.4%)	1(2.1%)	5(2%)
	し	0(0%)	3(15.8%)	2(9.1%)	3(3.3%)	1(2.1%)	9(3.6%)
	そして	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
	テ形	21(28.4%)	7(36.8%)	6(27.3%)	15(16.7%)	8(16.7%)	57(22.5%)
条件	ば	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(1.1%)	0(0%)	1(0.4%)
	たら	3(4.1%)	0(0%)	0(0%)	4(4.4%)	0(0%)	7(2.8%)
	と	2(2.7%)	1(5.3%)	0(0%)	4(4.4%)	4(8.9%)	11(4.7%)
	なら	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(1.1%)	0(0%)	1(0.4%)
総数		74(31.4%)	19(15.1%)	22(9.3)	90(30.9%)	48(20.3%)	253(100%)

次は「逆接の接続表現」、「因果の接続表現」、「継起の接続表現」、「条件の接続表現」の四つに分けて、性別とその接続表現の使用傾向及び機能との関わりについて考察したい。

5.1. 逆接の接続表現

(表2)に示す通り、女性より男性の方が「逆接の接続表現」やや多く用いる傾向が見られる。男性、女性共に、最も多用する逆接表現は「けど」である(例1)(例2)。(例1)(例2)の「けど」の例文から、前の文を認めた上でさらにあとに話し手の意見、感情を述べていることがわかる。また、「けど」を含め、「逆接の接続表現」は「継起の接続表現」の次に多用されることから、日本人の曖昧な話し方が見えるのではなかろうか。

(例1) (D03M00048 のデータにより) (L: 女; R: 男)

(前略)

L: (D: ドン) 5)¹、どうなんですか。考えてるのと違ったりしないんですか。

R: イヤ、やっぱりこれは例えばネ、アーノー、(D: な)、何にしても自分で一応最初に少しやってるから。

L: ハイ、アー、そうなんですか。

R: ウン、だから、そういう意味で、(オ)、こんなこと話していると、アノ、誰が喋ってるか一発で分かっちゃうだろうけど。

L: ハイ

R: マー、一応予期しないことはなかったです。

(後略)

(例2) (D03F0008 のデータにより) (L: 女; R: 女)

(前略)

L: やっぱりそういう言語の勉強していると、ア、研究されてると、こう、アー、こう風にしてあげないとか、こう風に

R: ハー、ね

L: って思いますか。

R: きっと余裕がないんだろうと思いますよね。

L: アー

R: やってみたいなと思いますけど、(D き)でも、子供に会ったたらもう。

L: アー

(後略)

注目されるのは、女性は「逆接の接続表現」の中で、二番目よく使用されるのは「でも」である。

Schiffrin(1987)や岩澤(1985)での分類を参考に、今回の例文を詳しく見ると、「でも」の使用は二つのグループに分けられる。一つは「相手への配慮を示す機能」を持つもので、もう一つは「話を展開する機能」を持つものである。

(表5)

	「相手への配慮を示す機能」	「話を展開する機能」
女性	9(39.1%)	14(61%)
男性	1(14.3%)	6(85.7%)

(表5)でわかるように、女性は男性と同様、「でも」の「話を展開する機能」を最も用いることが見られる。ただし、「でも」の「相手への配慮を示す機能」は男性より女性の使用率が大幅に超えることがわかる。具体例を見てみよう。

1 「CSJ」の5.研究用情報の付与によると、記号(D)の意味は「断片化した語」と解説している。
http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.htmlを参照

(例3) (D03F0036 のデータにより) (L: 女; R: 女)

(前略)

L: 今までこういう御経験ありますか。

R: ないです。

L: ないですか。

R: エー

L: (Dお) 人の前でっていうのは

R: ないですね、ウーン、でも(A)

L: ウーン、じゃ、ちょっと緊張しました。

R: でも(B)、アノー、ナンダロウ、アノー、ステージの上で

L: エー

R: こうみんなに向かって講演するとかじゃないんで

L: エエー、エエー、エエー、エエー

R: それよりは楽ですかね。

(後略)

(例3)の通りに、(A)の「でも」は、「話を進める機能」である。R女は人前で話す経験はないと話している。しかし、このコメントの後、「でも」を用いることにより、心境について焦点を主張する話題の展開が見られる。つまり、一度話題にのぼったことがらが再び話されるというパターンで、話を進める (topic shift) 用法でも言える。発話の最初に位置する、(B)の「でも」の中には、内容理解や会話のプロセスに関する指標となるマーカーとは異なった用法のものが見られる。相手が自分について配慮してくれたことへの応答の謙遜した表現を導くマーカーである。これは「話を展開する機能」とは違い、前後のやりとりの中で人間関係を調整する機能を持つと考えられる。

話者交替の中で、無意識のうちに使われることのある、「でも」の使用状況から見ると、女性の発話者は考えをまとめたり認識したり、次にくる情報を推察したりして、聞き手に配慮しながら会話を進めている。

5.2 因果の接続表現

(表2)の男女差に注目すると、男性は女性より、やや「因果の接続表現」を多用している。

また、「因果の接続表現」の中で、座談会の結果と一致し、性別を問わず、「テ形」が最も頻出する傾向が見られる。以下の例文を見てみよう。

(例4) (D03M0037 のデータにより) (L: 女; R: 男)

(前略)

L: ウーン

R: アノー、語順なんかも。

L: ウーン

R: わりといい加減だったりとか。

L: ウーン

R: で、単一民族だっていうこともあって。

L:ン、ウーン

R:お互いにこう、アノー、理解をしっかりとしなくても。

L:アー、(笑い)

横林・下村(1988)によると、『テ形』は理由を表すが、「から」「ので」より原因と結果の関係は弱い。後件には積極的な意志を表す表現は使えない。前件の結果自然にそうなる、やむを得ずそうするというような表現が続く。」対話って、共話だと言えるが、(例4)に示すように、座談会ほど強く自分の意見を強く主張しないので、因果を表すときほかの接続表現と比べ出現率が多いのではないだろうか。これは、テ形の「論理に乏しく」「情的な表現」6)であることに起因しているようである。また、後項の結果が「やむを得ず引き起こされたのだ」7)というテ形の受動性が、かえって、心的作用の表現には効果的に働いているのであろうか。

なお、「だから」の使用について、男性が多く用いることにより、自分の意見を強調する様子が窺える(例5)。

(例5)(D03M0048のデータにより)(L:女;R:男)

(前略)

L:どうなるんですか。ソノ、機械が感情を持つ訳じゃないから。

R:ウン、それも難しい語があつてね。あるんだけど。ソノ、機械に感情をね。

L:ハイ。

R:アノー、教える。って言うよりも少なくとも。

L:ウン。

R:表面的にね。

L:ウン。

R:感情を真似させるイミテートさせるような研究は随分やられてますよ。だから、怒ったような声の研究だとか。

L:ウーン

(例5)のように、「だから」を用いることにより、前項の事柄の当然の結果として後項の「怒ったような声の研究だとか」という話し手の判断を表し、強く主張するイメージが残る。

5.3 継起の接続表現

「継起の接続表現」の使用率を見ると、男女差はあまり差がないとの結果が出た。また、両方とも「テ形」の使用が最も高いが、男性より女性の方が若干多用する傾向にある。それは前節と後節の論理関係を考えず文を簡便につなげる時に用いられやすいと考えられる(例6)(例7)。

(例6)(D03M0004のデータにより)(L:女;R:男)

(前略)

L:それで、どうなったの?

R:で、暫く誰も刺さってることに気付かなくて

L:エー

R: (D?た) 二三日してから病院に連れてかれたみたいなんです。

L: エー

R: シ、エート、マー、僕が覚えてるのは、マ、ベッドの上で仰向けに寝てて、シ、ナニカ周りに看護婦さんがすらっと並んでて

L: ウーン

R: んで、シ、外が全然見えないんで見えないって言ったら、(D?ん)、顔の(あとい)の、顔の辺りにいた人が一人どいてくれて

(例7) (D03F0045のデータにより) (L: 女; R: 女)

(前略)

L: アー、あたしも一時期やったことあるけど、スクーリングに行けなくて、結局

R: アノー、語順なんかも。

L: ウーン

R: わりといい加減だったりとか。

L: ウーン

R: で、単一民族だっていうこともあって。

L: シ、ウーン

R: お互いにこう、アノー、理解をしっかりとなくとも。

L: アー、(笑い)

5.4 条件の接続表現

(表2)の通り、性別による使用する接続表現の頻度は同じ数値を示している。ただし、その項目を細かく調べると(表3)(表4)、女性、男性、それぞれ「たら」と「と」を最もよく用いる傾向にある。

(例8) (D03F0040のデータにより) (L: 女; R: 女)

(前略)

L: ヘー。

R: アノ、東京の人はネ、クールに。

L: アー。

R: 見てて面白くても

L: ウーン

R: 笑わないで我慢する。

L: ウーン、ウン、ウン、ウン

R: っていう人も多いらしいんですけど、関西の人は受けてあげる。

L: ウン、ウーン。

R: ちょっとでもおかしかつたら、わあわあ、受けてあげるっていう、(Dサー)、お客さんのサービス精神があるらしくてそれがね。

L: ウーン

(例8)のように、ほかの条件の接続表現、「ば」、「なら」、「と」より、置き換えられやす

い「たら」を女性が多く用いる。

(例9) (D03M0048 のデータにより) (L: 女; R: 男)

(前略)

L: (D: ドン)、どうなんですか。考えてるのと違ったりしないんですか。

R: イヤ、やっぱりこれは例えばネ、アーノー、(D: な)、何にしても自分で一応最初に少しやってみるから。

L: ハイ、アー、そうなんですか。

R: ウン、だから、そう意味で、(オ)、こんなこと話してる^と、アノ、誰が喋ってるか一発で分かっちゃうだろうけど。

L: ハイ

R: マー、一応予期しないことはなかった。

一方、(例9)に見る通り、男性は「と」を多用する傾向が見られる。「こんなこと話してる」という前件の条件を満たす時、後件が来る「一発で分かっちゃうだろう」は自動的に直ちに成立することが窺える。自然現象、真理、習慣などを表している。

6 「接続表現」のまとめ

以上、性別による接続表現の特徴もこの調査結果から分かる。調査した結果を下記の通りに示す。

まず、「逆接の接続表現」について、「けど」は性別を問わず、利用の割合が最も多い結果が出た。「でも」の「相手への配慮を示す機能」は男性より女性の使用率が上回る。また、「因果の接続表現」の「だから」の使用について、男性が多く用いることにより、自分の意見を強調する様子が窺える。なお、「継起の接続表現」のカテゴリーでは、男性は女性と同様に「テ形」を多用している。それは「テ形」は前節と後節の論理関係を考えず文を簡便につなげるときに用いられやすいからであろう。ただし、女性の方が若干多い。さらに、「条件の接続表現」について、性別によって使用する接続表現の頻度は同じであるが、女性は「たら」と男性は「と」を最もよく用いる傾向にある。さらに、「接続表現」の文法機能を理解することを通し、性別との関わりを究明し、日本人母語話者の会話管理の方法を明らかにした。

会話技術に関する研究としては、これらを総合的に見ていく必要があるし、また場面の変化への適応する方法も考慮することが不可欠であると考え、これらの究明は稿を改めて論じる。

附記：本稿は『2007年日語教學國際會議論文集』（東呉大學会場）（2007年4月）の内容に加筆し、修正を加えたものである。

注

- 1) 「CSJ」とは、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学の三者が共同開発した現代日本語の話し言葉研究用のデータベースである。自発性の高い独話（モノログ）を主対象としており、学会等における口頭発表の音声300時間分（以下「模擬講演」）、その他（インタビュー・対話・朗読など）から構成される
- 2) 梶村(2004)によれば、「自分の考えていることを自分なりに伝える日本語力」、いわゆる「自己発話力」が必要だとされている。梶村(2004)の定義を踏まえながら、本研究で扱う「自己発話力」とは、「話し手の交替（turn-taking）を行いながら情報を共有するのでは

なく、自分あるいは相手が話題を持ち出し、自分が主導権を握ったまま一人だけである相手に伝える『段落』レベルの発話持続能力」のことである。つまり、上級レベルの談話能力である。

- 3) 「だから」と「ですから」、両者の機能とも「前のことの当然の結果として後の事柄が起こるという話し手の判断を表す」語である。ただ「ですから」は「だから」より丁寧度が高いだけなので、同じ項目に入れた。
- 4) 「それから」、「～から」、「そして」の機能は同じ「前に述べたことに付け加える言い方」なので、同じ項目に入れる。
- 5) 「CSJ」の 5.研究用情報の付与によると、記号(D)の意味は「断片化した語」と解説している。
http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.html を参照
- 6) 森田 (1985) p.313
- 7) 森田 (1985) p.316～p.317

7. 参考文献

- 牧野成一他 (2001) 『ACTFL OPI 入門日本語学習者の話す力』を客観的に測る』アルク
- 岩澤治美 (1985) 「逆説の接続詞の用法」『日本語教育』56号日本語教育学会
- 泉子・k・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Elaine Tarone, Andrew, Andrew D. Cohen and Guy Dumas 1976 'A closer look at some Interlanguage terminology' Jefferson, G. 1972. Side sequences. In David Sudnow(ed.): Studies in Social Interaction, 294-338. New York: Free Press
- 加藤英司 (1984) 「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」『日本語教育』53号 日本語教育学会
- 森田良行 (1985) 「文章分析の方法」『応用言語学講座 I』明治書院
- 野田尚史他 (2002) 『複文と談話』岩波書店
- 大曾美恵子 (2006) 「日本語コーパスと日本語教育」『日本語教育』130号日本語教育学会
- 大竹芳夫 (2000) 「基準を表す情報—日本語「で」と「ので」及び対応する英語の接続表現の意味と機能—」『信州大学教育学部紀要』99
- 林淑璋 (2005) 「談話標識としての「それで」・「だから」と「じゃ」—整合関係を示す機能の比較—」『當代認知語言學與日語研究創新研討會論文集、台北』
- Schiffrin, Deborah. 1987, DiscourseMarkers. Cambridge: Cambridge University Press
- 梶村明子 (2004) 「自己発話力」を伸ばすことを目的としたタスクデザイン～コミュニケーション積み上げ型学習～『日本語教育学会春季大会予稿集』149-154
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能」『研究資料日本文法④修飾句独立句編』

副詞	連体詞
接続詞	感動詞

 明治書院
- 田中寛 (2001) 『日本語複文表現の様態』大東文化大学外国語学部
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』10月 明治書院
- 横林宙世、下村彰子 (1988) 『接続の表現』外国人のための日本語例文・問題シリーズ 荒竹出版
- CSJ 関連 URL:**
http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.html